

2023 年度イラン短期研修プログラム報告書

静岡県立大学国際関係学部国際関係学科 4 年

井上堅斗

0. 研修の概要

筆者は、笹川平和財団・イラン外務省付属国際関係学院 (SIR) 主催のもと、2024 年 2 月 10 日～22 日に行われた「2023 年度イラン短期研修プログラム」に参加した。研修では首都テヘランのほか、エスファハーン、ヴァルザネ、カーシャーンの 4 都市を訪れた。SIR での講義や学生との議論、視察を通じて、政治・外交、歴史、文化などに至るまで多くの側面からイランについて学ぶ良い機会となった。

1. はじめに

イランに関しては 2022 年以降の服装規定をめぐるデモ、中東の域内紛争に関わるアクターとの関係などからどことなく不気味な印象を持たれることが多い。イランが他国から良くないイメージを持たれていることは、SIR で同国の外交政策に関する講義をされた Sajjadpour 氏をはじめ、研修中に会話ししたイランの方々の多くにも理解されていた。

しかしながら、実際にイランを訪れ、様々なものを見聞きしたことを通じて、ニュースなどで見られるようなイランと実際のイランがどれだけ異なっているのかを筆者は実感することとなった。

本報告書では、「先入観」をキーワードに本研修で得た知見からイランの国内社会の様子と国際社会における立場について述べたい。

2. イランの国内社会：「反米」と「イスラーム」

現在のイラン・イスラーム共和制は、パフラヴィー王政期の欧米文化による浸食とそれに対する不満に端を発した 1970 年代後半の革命から、イスラームを掲げる国家として 79 年に始まった。米国大使館占拠事件や女性がヒジャーブを着用している姿は、革命を象徴する光景だろう。

筆者がイランに到着した 2 月 11 日は革命記念日であった。ホテルのテレビでは革命を祝う人々の姿が放送され、「米国に死を (Marg bar Āmrīkā)」と叫ぶ声も聞こえた。革命時に見られたような熱気が今も残り続けている。そう思うかもしれない。

しかしながら、2024 年 3 月に行われた議会選挙で投票率が過去最低¹となったように、現体制に対する支持の低さや期待の伸び悩みは事実のように思われる²。また、公共の場では女性のヒジャーブ着用が義務化されているが、2022 年以降のデモの発端がその着用をめぐってであったことから分かるように、テヘランなど都市部では着用していない女性も散見された。さらに、政治的問題に対しては米国に対する不満を漏らす者がいた一方で、街中

では iPhone をはじめ米国製品を使用している国民も一定程度おり、Instagram に関しては研修中にお話したイランの方々ほとんどが使用していた。加えて、SIR の学生の中には米国での留学経験を話す者や米国に対する憧れを示している者もいた。筆者にとってこのような光景は新鮮であった。

本研修では旧議会やサアド・アーバード宮殿をはじめ、ガージャール朝期など近代イランを象徴する施設へ伺う機会にも恵まれた。そこで筆者は、ある SIR の学生に「ガージャール朝期などは現在のイランにとってどのような意味を持つのか」と尋ねた。学生は「悪い印象を残していた」と答えた。近代のイランはロシアや英国など大国間の勢力争いの舞台として多くの介入を受けていた。ガージャール朝期には国内の利権が英国に譲渡されるなど、まさに大国への従属が続く時代であった。「悪い印象」とはそうした事実を踏まえての言葉だったのだろう。

イラン革命のスローガンは「独立」「自由」「イスラーム共和制」である。現在のイランは紛れもなくイスラーム掲げる国家である。一方で、革命が起きた要因にはそれ以前の国内外の文脈が深く関わっている。その点は現在のイランを考える上でも重要である。イランが大国に翻弄され続けてきた歴史を持つことや街中で人々が米国製品に享受している姿を見ると、「独立」と「自由」こそ本当にイランの人々が求めていることなのではないか。筆者はそう感じていた。

3. 国際社会におけるイランの立場：「危険な国家」

イランと諸外国との関係に関して、SIR では先述の Sajjadpour 氏からイランの外交政策を理解する上で重要な3つの理論的枠組みに関する講義を受けた。

Sajjadpour 氏によると、イランの外交政策を理解するにはその「普遍性」と「特殊性」を考える必要があるとのことである。「普遍性」とは全ての国が外交政策において目標とする自国の安全保障や経済を指し、一方で「特殊性」とはその国の地理的・歴史的条件に基づいた独自の目標を指している。例えばイランは周囲を15の国に囲まれているため、自衛を強化する必要がある。さらに、同氏は講義の冒頭で「思い込みは再考される必要がある。外交政策は真空状態から生まれない。その文脈が重要なのだ」と主張していた。日本や欧米諸国ではイランは特殊な国として描かれやすいが、一方で同じ国家として他国と同じように外交目標や独自の問題を抱えている。そうした状況を踏まえてイランの外交政策を見なければならぬのだろう。

筆者は以前から気になっていたこととして、「イランは歴史的にロシアから苦しい思いをさせられてきたのに、なぜ現在の関係は良いように見えるのか」という率直な質問を SIR の学生に聞いてみた。質問に対して学生は、「欧米諸国との関係に苦労しているからだ。その中でロシアとの関係を維持することがイランにとって重要なのだ」と答えてくれた。そして最後に補足としてこのように言っていた。「でも、国民感情としてイラン人はロシアのことが嫌いだ。」

米国などから制裁を受け、国際社会で隅に追いやられたイランが生き延びる道として選んだのが、苦い歴史を持つロシアとの関係維持だったのだ。現在のイランの外交政策はそうした諸々の対外的問題の上に成り立っている。そして、そのようなイランにとっての合理的な選択を積み重ねた結果が現在につながっているのではないか。筆者はそう思わされた。

4. おわりに

本研修は中東地域を研究している筆者にとって非常に大きな意味を持った。イランははじめ中東地域を訪れることは初めてであったが、毎日が刺激的であった。同時に、これまで筆者自身が思い描いていたイランと実際のイランは全く異なっており、筆者自身も先入観や思い込みに関われていたことに気付かされた。また、中東域内及び国際社会で強い政治的・社会的影響力を持つイランの外交を最前線で担う方々、あるいは今後担っていく学生から様々なテーマのお話を伺うことができたのも非常に貴重な経験であった。一方で、学生らと筆者自身の研究関心を含め、より詳細に議論ができなかった点は心残りである。

本研修において、筆者はこの他にも様々なことを見聞きした。今後もイランはじめ中東地域の動向に関心を持ち、今回の研修で得た知見を筆者自身の今後の研究やキャリアに活かしたい。

最後に、研修に帯同してくださった木村明日美様、横山隆広様はじめ笹川平和財団の皆様、SIRの学生及び職員の皆様、現地コーディネーターの穴田慶子様、その他イランで出会った多くの方々に深く感謝を申し上げます。

¹ 青木健太 (2024) 「No.179 イラン：国会議員選挙の実施とその意味」『中東かわら版』2024年3月7日、https://www.meij.or.jp/kawara/2023_179.html (2024年3月11日閲覧)

² 筆者がテヘランに滞在していた期間、テレビでは革命記念日に行われたと思われる集会や行進の様子が連日放送されていた。また、街中や施設など多くの場所に革命の指導者ホメイニー氏や最高指導者ハーメネイー氏らの肖像画や壁画があり、国民の忠誠心を買おうとする現体制の姿が見られた。